
末姫様の婿選び

葉鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

末姫様の婿選び

【Nコード】

N6629X

【作者名】

葉鳥

【あらすじ】

かつて声を失い、とてつもなく人の匂いに敏感な末姫も御年十七。難航した婿選びの末、人数合わせのリコウに白羽の矢が刺さる。「私がこの世を生きるには鼻が曲がりそうで」旦那様に出会えたのも我が天啓、末姫は己の道行きを選びながらリコウの匂いを堪能する。人は誰しも生涯で唯一の天啓を得る国での物語。あっさりめでさっと終わる予定です。

選ばれた婿殿

陶波国とつはの末姫と言え、王による一時期の溺愛が思い出される。もう十年近く前だったか、内々であれど会談にも隣席させるほど近くに置いていたとか。子供には難しい政治の話をする中、小さな娘が混じる不思議な光景だったという。

しかしそれも長くは続かない。末姫の体調不良を機に、どこにでも伴うことはなくなったようだ。と言うのも、何が原因かは不明だがその声は失われてしまったのだ。元来大人しい質であった末姫は完全に黙し、国中の医師を集め手を尽くしても末姫の声は戻らなかった。

（で、これが件の末姫というわけか）

手を伸ばせば届きそうな距離に彼女はいた。

その娘は白い面を扇で隠し、艶やかな目元だけを覗かせている。年齢は十七と言っただろうか。少女らしい淡さと匂い立つような色香が混じり、どこか不安定ゆえの魅力を感じさせる娘だ。顔の半分を隠していても、漂う艶やかな雰囲気は隠せない。

卓子を挟んで向かいに座る末姫と傍近くにはべる侍女を順に眺め、リコウは心中眉をひそめていた。

とんだ茶番だ。さつさと終わらせてしまうに限る。

「この度リコウ殿をお呼びしましたのはご存知の通り、末姫様の婿殿をお選びするためにございます」

しずしずと侍女が告げる名目を聞いたのはリコウで何人目だろうか。

末姫の婿選びはしばらく前から始まり、既に幾人もの相応しいであろう男達がこの場に呼ばれているはずである。立候補をせず、初期の婿候補の内にいなかったリコウが今ここに呼ばれているのだから。

ら、その誰もが末姫の目に適わなかったのは明らかだ。

言の葉を紡ぐ声を持たない末姫は、ただじっとリコウを見つめている。

婿としての基準など分らないが、リコウは己が選ばれるとは露ほども思っていなかった。柔和とは程遠い己の容姿をよく理解した上で、少しの笑みを浮かべることもない。姫君たちにしてみればさぞ恐ろしいだろう。

「して、末姫様はいかにして伴侶を選ぶのでしょうか」

それなりに高位の職に就くから呼ばれた人数合わせに過ぎない。そう自負するリコウは、さつさと終わらせたいとばかりに促した。

「リコウ殿は現宰相補佐であり、前任の宰相閣下の御孫であらせられる。その身は清廉潔白、不正を許さぬ正義をお持ちとお聞きしております。——ここまでで間違いはありませんでしょうか？」

随分と持ち上げられた釣書にリコウは口の端を引き攣らせた。

「ずいぶんと過分な評価です」

「末姫様はその真偽を知りたいとおっしゃっております」

侍女は末姫に視線を移し、末姫は頷いて立ち上がる。

「……末姫様？」

音のしない足捌きでどんどんと近寄る末姫にリコウは心持ち仰け反っていく。

「この場でのことは他言無用に願います」

淡々と侍女の声が響いた。

その台詞は「後の方々にも公平を期すため」と、始まる前にも聞いたが、念を押す雰囲気になだぬものを感じた。

あと一步の距離で末姫は止まる。いつの間にか扇は閉じられ、末姫のあどけなさや艶やかさが混じる面が晒されていた。末姫は何か期待するように瞳を輝かせ、ゆっくりと最後の距離を詰めた。ぽつてりと濡れた唇が薄く開きながら近付き――

すつ。

はあ。

「……………は？」

リコウは己の肩口で聞こえた深呼吸に思わず目を点にした。

満足したのか、リコウが固まっている間に離れた末姫の小さな口が笑みを象^{かたど}っていく。

彼女はくるりと振り向いて侍女に頷いた。リコウから見えない位置で、握りしめた片手がぐつと上がっている。

「おめでとうございます。此度の末姫様の婿選^{むこ}びは、リコウ殿に確定いたしました」

詳細は追って連絡いたします。

そう告げる侍女の片手も末姫に返すように上がっていたのだが、リコウの視界には写らなかった。

初夜の筆談

呆然とした婿選びからあつという間に時は過ぎ去り、婚儀を終えた夜。

リコウの邸やしき、詳しくは寢室、その寝台の上に末姫はいた。お互い向かい合って座りながら、二人の間に横たわるのは沈黙である。夫婦であるという形がここまで整っていないながら「どうしたものか」とリコウは嘆息する。

姫を降嫁するに相応しい家柄であつたのも功を奏し、末姫がリコウを選んだその日に婚約はあつさりと認可された。リコウは独身であつたし恋人もおらず、障害のなさ過ぎる結婚はすべてがとんとん拍子だつたのだ。

ここまで来て往生際の悪いことは言うまい。既に腹は括つた。末姫を貰い受けるに当たつての利益も不利益も折り込み済みだ。どんな理由かは知らないが、末姫がリコウを伴侶として選んだのなら出来る限りそれに応えよう。それくらいの気構えは出来ている。

「末姫殿、」

話しかけようとしてリコウは一瞬ためらつた。声を持たない末姫の意思伝達手段は、なぜか阿吽の呼吸で意思の疎通ができているらしい侍女が筆談に頼る。初夜の寢室に侍女がはべるわけもなく、寝台の上で筆記用具を広げられない。リコウが迷つた少しの隙に末姫は寝台を降り、燭台の置かれた机に向かった。いつでも筆談が出来るように配慮された筆を取り、リコウへ振り向く。

（気の利かない娘ではない）

むしろ相手の気配に敏感な性質をしている。これまでもリコウの意図を先回りして準備していることが幾度かあつた。

「末姫殿。なにゆえ私を選んだのです」

今さらながら聞いておきたいことだった。末姫はきょとんとした顔で首を傾げると、筆を走らせる。

あなたが私に興味がないからです

「は？」

予想外の言葉にリコウは再び声を詰まらせるが、気にせず末姫は筆を取った。

立場も人格も含めてあなたは末姫に興味がない

ですよ？ と小首を傾げる様は可愛らしいが、リコウは末姫が何か得体の知れないものに見えた。興味がなかったのは当たっているが、さすがに娶った妻に無関心を貫くほど薄情ではないつもりだ。「そして何より」と書きかけ、そこで初めて末姫は筆をためらった。一呼吸の後、一気に筆を滑らせる。乱れのない美しい手跡だ。

あなたは誰よりも良い香りがします。あなた自身が持つ清廉さが好ましい

つ、と差し出された紙面を見てもリコウは何と返せば良いのか分からなかった。そういえば見合いの日に侍女が何かを言っていた気がする。清廉潔白だ何だと誇大表現された釣書に対して「真偽が知りたい」と。

それにしても香りとは一体何のことだろう。

夜着の袖口に鼻を当ててかいでみるが特に変わった香りはしないように思う。頭を捻るリコウの袖を引いて、末姫は新しい紙を差し出した。

「末姫様……」

リコウは文面を驚いた目で見ると、不意に肩の力を抜いた。末姫は真剣な顔でリコウを見ている。自然と笑みがこぼれた。そういえば今宵は初夜なのだな、と当たり前のことを思う。

「私は妻に無体を強いる夫ではないつもりです。誓いますよ。早死にするつもりもありません」

あなたにこの身を預けても良いでしょうか。そして私と末永く共

に生きてくださいますか

そう書かれた紙を机に置き、リコウは妻となった娘をそつと見下ろした。

「あなたは私の香りを好ましく思うのですか」

末姫はリコウを見上げたまま、こくりと頷いた。長い睫毛が縁取る、黒く濡れた瞳は真摯だ。何だか良くは分らないが、好きだというなら問題はない。

「ならばもつと近くに来ればよろしい。今日から夫婦なのですから」
リコウが軽く広げた両腕の中へ、末姫はためらうことなく納まった。細い身体を密着させ、リコウの胸元に鼻をすり寄せている末姫はひどく嬉しそうだ。ああ、とリコウは顔を伏せ、柔らかな髪に頬を寄せる。

良い香りがするのはこの娘の方だな、と一人笑んだ。

天啓

首を撫でられるようなくすぐったさに、リコウはぼんやりと目を開いた。うつすらと白む部屋の中、夜が明け切らない時刻だと悟る。起きるには早い時間だ。平素から滲む、礼節に隠した鋭さも今は鳴りを潜めている。

それにしても腕の中が温かい……と思い、そこでリコウは我に返った。

（末姫か……）

抱き寄せる身体は柔らかく温かい。彼女は華奢に見えるが、女性らしい魅力的な曲線を持つことを知っている男は自分だけだろう。誰に向けるわけでもないが妙な優越感を抱いた。

——このむず痒さは何なんだ。

再びくすぐられるような気配を感じて、リコウは意識を戻す。末姫は頭をリコウへ擦り付けるようにしてもそもそと動いていた。その黒髪が首筋をくすぐる感触で目が覚めたのだろう。

納まりの良い場所を見つけたのか、末姫は動きを止め、すんすんと匂いをかぐ行為に移行していた。まるで飼い主に気を許した小動物だが、匂いに対する執着を見せ付けられ、リコウとしては複雑な心境だ。

（日中はたまに妙に危うげな色香を見せるが）

安心しきった無邪気な寝顔がここにある。そう思えば庇護欲が湧いてくるのをリコウは自覚していた。

声も上げられず、涙をいっぱいに溜めた瞳に熱を込め、ひたすらリコウにしがみついていた昨夜の娘を思い出す。王家の末姫が。声を失った娘が。この胸の中で寝息をたてているのが、リコウの妻なのだ。満足げな表情でリコウの匂いをかいでいる末姫の髪を撫で付けてみる。癖のない黒髪はしっとりとした感触を指先に与えた。

病を理由に表立って王に随行しなくなった末姫だ。その後、噂にも上らなくなるほど後宮から出ずに過ごしていたはず。では——この娘はもう天啓を得たのだろうか。

陶波国の民は生涯に一度、必ず天啓を授かる。

大きいものなら、かつて国を救った英雄は天啓を得て戦場を駆けたとか、齡十で天啓を得たある娘が、その英雄を助けるためだけに何年も森に籠もったとか歴史に残るものがある。しかし小さいものだと草木に水をやるとか、ある日ある場所で小石を投げるだとか何に結びつくのやらさっぱり分からない些細なものだ。それでも意味のない行動など一つもなく、後の何かに繋がっていくのは確かなのである。例えどのようなものであれど、それを全うすることに誰しも誇りを感じていた。

内容が何であれ陶波国の民にとって天啓に従うことは至上の喜びであり、「天啓を得るまでは死ねない」と言い回しはどこでも聞く。というのも、人生で最低一度は授かるものでも、いつ天啓が下るのかなど誰にも予測が付かない。幼少期に得る者から老人になるまで授からない者までいるほど幅は広いのだ。

そして、未だリコウは天啓を得ていなかった。

天啓を授からないことに焦りはない。いずれ最適な時をもってして得るのだろう。だがしかし珍妙な天啓である場合、末姫を巻き込まないものであってほしいと願う。数年前に天啓を得たりコウの弟など「虹色トカゲを探しに行く!!」と家を飛び出したきりだ。妻を置いて出奔するのは非常に避けたい事態である。

天啓と言えば大抵のことは容認されるこの国であるが、天啓は偽

ることが許されない。不思議なことに、罪を犯せば神殿の管理する”壁”にその名が浮かび上がるのだ。天啓を私利私欲に利用できないのは明らかだった。

リコウが末姫の天啓を気にするのは、「まさか末姫まで虹色トカゲを探しに行かないだろうな」という心配だった。弟から身をもって学んだ天啓の不可思議さにこれ以上翻弄されるのは御免なのであった。

一人身震いしていると、腕の中の末姫が身じろいだ。どうやら起きたらしい。軽く目を擦って眠気を飛ばしているのをリコウは黙って見ていた。

末姫は寝ながらかいでいたりコウの匂いを、目が覚めてからも確かめたかったようだ。すんすん、と鼻を動かしている。

「……？」

匂いをかいだ後に、末姫はあどけなさの残る顔を不思議そうに首を傾げた。

「……！？」

胸倉に突っ込む勢いでもう一度匂いをかぎ直し、大きな瞳をパチクリさせている。これは可愛らしいとリコウは思う。

「……！！！！」

最後に何かに気付いた顔で末姫はじたばたし始めた。その顔はひどく赤い。元々不思議な姫だとは思っていたが、こんな挙動不審を見たのは初めてだった。

「末姫殿……？」

よほど気が動転したのだろうか、顔を手で覆って悶えている。とにかく落ち着かせようと肩に手を掛けたところで、末姫は顔を上げた。末姫は真っ直ぐにリコウを見上げながら口を開く。声が出ないのがもどかしいようで、何度も開閉を繰り返した。

『り、こ、う』

唇の形から読み取れたのはリコウの名前で。喉を押さえ空咳をしながら、何度も、何度も。

「末姫殿——」

彼女の赤く染まった眦から涙が伝っていく。リコウが親指でそれを拭くと末姫は切なげに眉を寄せた。なぜ泣いているのか分からない。けれどこんな悲しい顔で泣かせたくはない。白桃のような頬に、さらに流れた涙を拭おうとした時だった。

「……っ、り、こっ、さま……！」

お互いに目を見開く。

末姫はただ呆然と喉を押さえたまま。リコウは己の耳を疑って。ひどく掠れていたが、末姫の喉から搾り出すように発せられた声は、確かにリコウの名を呼んでいた。その事実が脳内に浸透する前に、リコウの頭は真っ白に染まる。

——天啓が、下ったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6629x/>

末姫様の婿選び

2011年10月21日14時12分発行